#五章 ゲノム・クトゥルフ

第五章

#半年前。

#【世界停止】により白夜の結界に穴が空いた。それまで一色かごくに二色までしか出ることができなかった魔導兵たちが、三原色まで脱出できるようになった。

#　その時にアビィが真っ先に『り』から外に出たのには、彼女なりに理由がある。

#　一つ目は、最初に彼女が出れば他の三色は出ることができなくなるからだ。白夜の結界の穴は、定員制と言い換えてもいい。外に出られる容量が限られているのだ。

#　そして二つ目、他の弟妹たちは排他的な傾向にある。彼らが審査すれば、三日で人類不要のを押すだろう。そもそもに乗せるのは自分たちだけでいいと言っていたのだ。

#　仲間思いに育ってくれてしいが、人間たちを仲間外れにするのはよろしくない。

#　弟であり長兄であるギィノームに自分の役目をすべて押し付けることで他の魔導兵全員を出し抜いたアビィは、『絡繰り世』に新しく空いた穴から外の世界へと脱出した。

#　とりあえずの目的は、外でできた新しい妹。自分の本体がどうなっているかも知らず、端末に意識を置いてうろうろしている彼女を確保するつもりだった。

#　だが上下に並ぶ街並みで真っ先に出会ったのは、白い箱に座った少女だった。戸惑いに動きをめたアビィに、彼女は語りかける。

#「ここは地下『遺跡街』です。本来は封印されていますが、とある奴の気まぐれで私は招かれました。そいつ曰く、これ以降、入り口は開きっぱなしになるそうです」

#　親切な少女が場所を教えてくれる。

#「私の名前はモモといいます。アビリティ・コントロール。取引をしましょう」

#　なぜ自分の名前を知っているのだろうか。疑問に思うアビィに対して、モモと名乗った少女は椅子にしていた白いキャリーケースを開けた。

#　中には、しゃがんだ姿勢で固まっている少女がいた。黒髪で童顔のかわいらしい少女だが、もっとも目を引いたのはだ。

#　白い刃が刺さっている。そこに秘められた力はアビィの興味を引くのにあまりあった。

#「私は、こいつをどうあっても隠して守り通さなければいけません。そこの入り口から、お前の地区に入れて守り通すことを要求します」

#　アビィは答えかねた。魔導兵にとって、自分の地区に異物を入れるのは気持ちいいものではない。モモの提案を人間の感覚に置き換えると、隠しものをするために口から飲み込んで胃に隠す程度には不快感が発生するものだ。

#「利点は二つあります」

#　それを知ってか知らずか、モモは指を二本立てて淡々と続ける。

#「一つ。こいつの情報そのものです。異世界人であり、『塩の剣』付きです。お前の方舟に乗せるかどうか検討する対象にはなるでしょう。レベルで情報を解析すれば、なにかしら得られるものがあるかもしれません」

#　方舟のことも知っている。警戒度が上昇する。

#「二つ。お前の捜している人間の居場所を教えます。笑える話、原色概念に取りかれた人間もどきです。そいつと一緒にいる人たちと一緒に行動することで、お前の望む情報は手に入るらしいですよ」

#　アビィはジェスチャーで承諾の意思を伝えた。アビィにとって、同族以上に大切なものはない。自分より幼いのならば保護対象であり、自分より長く生きているなら破壊対象になる。妹の情報が手に入るなら、多少の不快感を飲み込むことに迷いはない。

#「あと、これは純粋に助言なんですが」

#　話を聞きながら羽を休めているアビィを見るモモの目は、なぜか微妙に戸惑っていた。

#「だとは思いますけど……こっちにいるうちは、人の形をとったほうがいいと思いますよ」

#　その助言を聞いて、モモから黒髪の少女の体を預かって以来、アビィは彼女を成長させた擬態をしている。

#

#

#　地響きが、サハラの背中を打った。

#　遺跡街が丸ごと揺さぶられるかのような揺れだ。肩越しに振り返ると、地下にぶら下がっていたいくつかのビルが丸ごと落下していく光景が見えた。

#　メノウとゲノムが戦っていたはずの場所だ。崩壊の中心部は、なにも残っていない。

#　特に巨大だった『駅ビル』すらも衝撃で消え去った光景に恐怖を覚えつつも、サハラは地面をって進む。

#　メノウたちのほうの戦闘は終わったのだろうか。どちらが勝利したのか。メノウの勝ちを確信できるほどゲノムはい相手ではないことを、サハラはよく知っている。

#　そもそも、人の心配をしていられる余裕など、いまのサハラにはなかった。

#「いたぞ」

#　サハラは追いかけ回されていた。

#　シアタールームに乗り込んだゲノムとともに来ていたのだろう。映画館の周囲の建物を取り囲んでいたのならば明らかに先ほどの攻撃に仲間が巻き込まれているはずだが、そちらをみる様子はない。

#「いけー！　そこだぞサハラ君！　あ、違うって！　いま【導力砲】を撃てば一網打尽にできただろー！　ほらいまっ。……あー、タイミング逃したなぁー」

#　このい二号さえいなければ、とっくの昔に逃げ切れたはずだ。

#　サハラによってに抱えられているノノは、さっきから戦闘に参加するそぶりがないのに指示だけは一人前だ。なまじ未来が見える【星】の目がついているものだから、自分の指示が正しいと確信できてしまうのだろう。

#　率直に言って、大変うざったい。

#「ノノさぁ」

#　もはや定番の避難場所であるサハラの影から、ひょっこりとマヤが顔を出す。

#「戦えないくせにヤジ飛ばすのやめたら？」

#「なんだよぅ。ボクの楽しみを取り上げないでくれたまえよ。やいやと騒ぐのが一番楽しいんだぞ？」

#「うざ」

#　マヤが白い目でノノを酷評する。

#「……やっぱり、こいつって戦えないの？」

#　うるさい割には自分で動かないとは思っていたのだ。魔導兵のくせに戦えないということはないはずだが、と疑念の視線を向ける。

#「少なくともあたしはノノが戦っているところ、一回も見たことないわ。実際、どうなの？」

#「嫌だなぁ。天才たるボクは生まれてから十七年間、戦闘なんていう野蛮なことをしたことがないぜ？」

#　この状況で役立たずですという自己紹介をしているのに、なぜか得意げに胸を張る。サハラに抱えられてそんなことをするから、ただのエビぞりの姿勢である。

#「この体も演算用だから身体機能は人並み以下だ！　見た目通りのか弱い天才美少女として丁重に取り扱ってくれたまえ！」

#「足手纏いっ……圧倒的ただの足手纏い……！」

#「ホントにね。自信満々に言うことじゃないのに、なんで誇らしげなの？」

#「マヤもボクと変わらないだろ？」

#「ハァ!?　サハラはあたしの下僕だからいいの！　ね、サハラ？」

#　足手纏い一号が足手纏い二号と一緒にするなと同意を求めてきたが、戦闘という分野だと役に立たなさはどっこいどっこいである。これが古代文明を崩壊させた四大の元凶の半分だというのだから泣けてくる。

#「……ぐす。ほんっと、私はなんでこんなことしてるの……？」

#【魔】と【星】。史上で最も有名な純粋概念持ちを二人連れての逃避行だ。グリザリカでだらだらしていた頃が懐かしい。そういえば、いま突然いなくなった自分はどういう扱いを受けているのだろうか。アーシュナあたりが捜してくれているといいなぁ、別に『盟主』は探してくれなくていいや、と平和だったあの頃に思いをせる。

#　ちょっと涙目になりながらも、街を駆け抜ける足は一瞬たりとも止まらない。

#　曲がり角を右折して、舌打ちを飛ばす。

#　体の一部に導力義肢を付けた集団。ゲノム直属の部下だ。冒険者から逃げていたら、もっと悪い相手に行き当たった。

#　しかもここで戦闘をすると、先ほどの冒険者たちがやってきて挟み撃ちにされてしまう。

#「ほらー。さっき倒しておかないからだぞ。増えてきたじゃないか」

#　イラっとしたサハラのこめかみに青筋が浮く。

#　ノノの言う通りなのだが、戦えない分際がしたり顔で指示を飛ばしてくるのはあまりにも神経をでされる。そもそも義肢を付けている相手ならば、最悪でもマヤの純粋概念があれば負けることはないのだ。

#　ここでノノだけ放り捨てて逃げるか？

#　サハラの思考が、にその選択肢を検討した時だ。

#　周囲の男たちが、突然、立ち止まった。

#　先ほどまで声をらげてサハラを追い回していた全員が一律して震え始める。異常な挙動に、思わず足が止まる。

#　サハラたちが見ている前で、義肢からの肉体侵食が始まった。かつて、サハラがバラル砂漠で自分の義肢に飲み込まれた時とほぼ同じ現象だ。

#　顔に到達した時点で、べこりと顔面がむ。

#　服の下でボコボコと肉体が変形し、体つきも顔つきも均一になる。

#　絶句するサハラとは裏腹に、まったくの別人たちが同一人物になっていく光景を見たマヤが、なぜか目を輝かせる。

#「うわっ、あたしこんな感じのＳＦ映画、見たことある！　現実でお目にかかれるとは思わなかったわ」

#「へぇ。ボクは知らないなぁ。どういうタイトル？」

#「サメ映画と比べるのもおこがましい、超大ヒットタイトルよ」

#　この異常事態を前にしてなぜか冷静な異世界人組がサハラにはさっぱりわからない映画談義を始めている。

#　変形を終えた男たちが、無言のまま顔から導力銃を取り出した。

#『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル：中距離掃討型】』

#　本能的な恐怖に駆られたサハラは、それよりも早く銀腕をガトリング砲に変えて掃射する。意外なことに避ける様子も防ぐそぶりもなく、あっさりと命中して男たちがバタバタと倒れていく。

#「はあっ、はぁ……！　な、なにいまの!?」

#　回避をするそぶりも、魔導を使って防ぐ様子もなかった。

#　出来の悪い悪夢だったら、どんなによかったか。恐る恐る死体の顔を確認してみれば、やっぱり全員同じ顔をしていた。

#　忘れるはずもない。かつて東部未開拓領域で出会った、ゲノム・クトゥルワだ。

#　どうして別人だったはずの人間がゲノムに変わるのか。『絡繰り世』で戦った時と違いすぎる。混乱していると、背後からつんつんとをかれる。

#「サハラ君、サハラ君」

#「なに!?」

#　苛立たしさを込めて振り返ると同時に、サハラの頰を銃弾がめた。

#　たらり、と血が垂れる。硬直するサハラに、ノノがいい笑顔で親指を立てる。

#「そこ危ないぞって言いたかった。よく避けたね！」

#　ぷっつん、緊張の糸が切れた。

#　すうっと頭の血の気が引いていく。許容量を超えたいっぱいいっぱいの状況に、サハラの表情からすべての感情が抜け落ちる。

#　サハラは、狙撃の方向に顔を向ける。

#　狙撃手は目視可能な範囲にいた。通路がつながっていない建物の窓から、スコープ越しにこちらを確認している。

#　普通に考えれば、一方的に攻撃できる安全圏。

#　だがサハラにも、この距離で攻撃する手段はあった。

#

#「……やべぇ。あいつ、と相性がよくねえな」

#　狙撃を外したゲノムは、相手の能力を見て困った表情を浮かべた。

#　五人の自分で襲いかかったのだが、十秒としないうちに処分されてしまった。『』をそこそこ追い詰めた連携が、まったく意味をなさずに崩壊したのだ。

#　原因はあの銀腕だ。

#　変形した銃器の威力は大したことがない。ゲノムが生産依頼をしている機関銃以下だ。普通の神官や騎士ならあっさりと避けるか防ぐかするだろう。下手をすれば、導力強化でしのがれてしまいそうだ。

#　だが、ゲノムだと防げない。紋章魔導も使えない。導力強化で動くこともできない。結果として棒立ちで的になるカカシになる。

#　実のところ、ゲノムにとって最大の弱点は彼自身が流通させた導力銃なのだ。

#「雑に周辺制圧するのは俺のお株のはずなんだがなぁ」

#　普通、神官にしろ騎士にしろ、白兵戦を重視している。導力銃は【障壁】で防いで接近戦で片付けるのが定石だ。だというのにあの修道女の戦法は、ほとんどゲノムと一緒といってもよかった。

#　近接で高威力の【杭打ち】。小回りが効いて殺傷力のある導力銃化。やたらと使い勝手がよさそうな【導力砲】。多人数の弱者をするためにあるかのような構成だ。

#　ゲノムと、よく似ている。

#　それに加えて、未来視だ。あれがいては狙撃の意味がない。複数人で多角的に狙撃をしても、事前に着弾点が読まれてしまっては命中するはずもない。残る手は数に任せて押しす物量作戦だが、周辺にいる部下の数が少々ない。

#「ていうか、そもそもだ。なんで、俺の【】が通じねえんだ？」

#　それが、最大の疑問だ。

#　あの少女に導力義肢を付けたのは自分だ。

#「俺のは【防人】の奴からだぞ。絶対にこっちが上位のはずなんだが、なにか混ざってんのか、って、あー……狙撃もできんのかよ、あの娘っこ」

#　しかも、自分より腕が良さそうだ。

#　いよいよ面倒だとしかめたゲノムの顔面を、一発の導力弾がき飛ばした。

#

#「どっかのピンクゴリラでもなければ、当たれば死ぬのよ」

#　狙撃した弾丸が相手を貫いたのを確認したサハラは、言い捨てる。

#　導力強化に長けた者は生身で導力弾を弾くが、それは例外だ。たまに直感で狙撃を避ける野生の勘を持ち合わせているのは、人間かどうか怪しいレベルの例外だ。やはりあのピンク髪はゴリラの一種なのだろうとサハラは結論づけた。

#　基本的に、導力銃は人体を貫通して破壊できる。

#　混乱を通り越した現実逃避の末に頭を冷やしたサハラは、狙撃銃に変えていた導力義肢をもとに戻す。

#　ここ数日の行動はあまりにも自分らしくなかった。真顔で振り返る。

#「『遺跡街』から脱出しようと思うけど、どう？」

#「いや、サハラ君」

#　ノノがおずおずと手を挙げる。

#「さっきも言ったけど、いまは世界の危機でね？　放置すると大変まずいことになるんだよ」

#「黙れ役立たず」

#　サハラは無表情のまま無根拠でした。彼女の未来視に頼るつもりは毛頭なかった。

#　ノノに頼るということは、彼女にいいように扱われるに等しい。

#「きっとメノウがどうにかしてくれると私は信じてるから逃げる」

#　提案のフリをした決定事項だった。

#　を返す。このままノノも置き去りにして逃げてやると走り出した足首を、がしっとまれたサハラは派手に転んで顔面を強かに地面に打ちつけた。

#「……ッ！　──っ!!」

#「サハラ」

#　サハラの逃亡を防いだのは、マヤである。

#　影から出てきた彼女は、声も出せずにするサハラの側にしゃがみ込む。

#「あたしは、を止めたい」

#「……痛いんだけど」

#「あれは、あたしの成れの果てだから。あたしの一部が問題を起こしているっていうのなら、あたしが止めないといけないと思うの」

#　マヤは転倒で痛打した鼻の頭を押さえるサハラを無視して続ける。

#「それが、あたしのやりたいこと。この世界で、必要とされる理由。そこを外しちゃダメなの」

#「マヤ……！　立派になったなぁ！　ボクは嬉しいぞ！」

#「ノノに褒められてもなんにも嬉しくないから黙って」

#「……悲しい。成長しすぎてボクはしいぞ」

#　冷たい目線に迎撃されたノノが、しょんぼりとれる。

#　サハラはじゃれている二人のうちマヤに訴える。

#「とりあえず、謝ってほしい。かなり痛かった」

#「うん。ごめんね、サハラ」

#　マヤがさすりと撫でる。

#「でもサハラは、あたしのために頑張ってくれるでしょ？」

#　やりたくない。やりたいはずがない。

#　ただ、この子に頼まれると断れなくなっている。

#　大きく息を吐いて立ち上がる。

#　サハラたちの行く先には、巨大な環境制御塔がそびえ建っていた。

#

#「聞いた限りだと、自分が義肢を与えた人間を乗っ取ることができるんだろうね」

#　天井区画で遭遇した敵、ゲノムのことを話したメノウに、アビィはそう言った。

#　下の街で合流した二人は、環境制御塔へ向かう道を歩きながら情報をすり合わせていた。その結果に導き出されたのが、先ほどの言葉だ。

#「最初にみんなを襲った子たちも、どっかしらに義肢を付けていたでしょ？　それを装着した人間を乗っ取ってるんだろうね」

#　ゲノムが売りくもので有名なものが、三つある。

#　人間。導力銃。

#　そして、導力義体だ。

#　肉体の欠損を埋め合わせて稼働する義体は、現行技術では人工的に作ることはできないオーバーテクノロジーだ。『絡繰り世』にいると、人体が欠損した部分が義体となって形成される。この町の都市機能が修復機能を持つように『絡繰り世』では人体の機能をが補うようになっているのだろう。

#　だが当然、もが『絡繰り世』に入れるわけではない。グリザリカと和平を結んだとはいえ、あの境界線は人と魔導兵が争う最前線だった。に入って無事に帰ってこられる保証などなかった。

#　だというのにゲノムはどうやってか、誰にでも接続できる義体を手に入れて売り捌いていた。

#「自分の魂が入った義体を他人が装着することで、徐々に接続した肉体から精神を侵食して魂を自分と同質のものに変質させて、命令に忠実な人間に仕立て上げる。最終的には、いつでも乗っ取って自分の思うようになる端末にしているっぽい」

#　ゲノム直属の部隊の人間は、体の一部が導力義肢になっていた。手足でなくとも、目や胴体の一部、あるいは内臓が入れ替わっていてもおかしくない。失った部位を義体で補塡してくれたからこそ、ゲノムに心酔して彼のにいるメンバーも多いと言われていた。

#　それは一部では正しく、大部分で間違っていたのだろう。

#　肉体と直接つながっていれば、魂の汚染にも対抗するのは難しい。ゲノムは洗脳に近い手段で部下の忠誠を得ていたのだ。

#「提供した義体から、他人を乗っ取って自分の一部にする。ゲノムが複数人いる仕組みが、それなわけね」

#「だねぇ。完全に乗っ取った時に顔に穴が開くのは、そこが遠隔操作するための導力の経路になっているからだね。あの穴、端末を操るための本体とつながっているんだと思うよ」

#「となると……」

#　思い起こされるのが、サハラの境遇だ。

#　彼女のあの右腕は、ゲノムと戦って敗北した後、『絡繰り世』でいつの間にか導力義肢が精製されていたと言っていた。

#「サハラ、大丈夫かしら」

#「大丈夫だよ。あんまり嬉しくないけど、妹ちゃんの魂には原罪概念が混ざってるから。原色概念だと、どうあがいても干渉は無理」

#　それなら、いい。

#　上下で分断されてしまったが、サハラたちが致命的な事態にることはないだろう。

#　おそらくゲノムは自分の端末にする部下を使い分けている。

#　戦った印象として、ゲノムの個人としてのスペックはずば抜けて高いとは言えない。彼の本領は、同一思考をする複数の自分による連携だ。複数の自分が、まったくのタイムラグなしで同じ情報を共有している。この情報の伝達性が一番怖いところである。

#　だからこそ個人レベルで彼より戦闘力が高い部下は自分が操作する端末にせず残しているはずだ。そしてその人員は、間違いなくメノウたちに差し向けてくる。

#　なぜならば、せっかく温存している少数精鋭をいま天井区画にいるサハラたちと戦わせると、マヤの原罪魔導の一発で無力化されかねない。最初にメノウたちを襲った精鋭があっさりと無力化されたことは、ゲノムも把握しているはずだ。

#　そう考えていると、アビィが不意に立ち止まった。

#「そうだ、忘れてた」

#　アビィは歯車が描かれた自分のおに手を入れて、一冊の本を取り出す。

#「はい、メノウちゃんへのプレゼント」

#「これって……教典？」

#　意外なものを差し出されて、メノウは目を見張る。アビィが教典を模倣して造ったものかと思ったが、違った。手に取ればわかる。本物の教典だ。

#「どうしたの？　地下に来てから、神官なんて一人もいなかったでしょ？」

#「かわいい女の子からの贈り物だよ」

#「かわいい女の子って、あのねぇ……」

#　自分でかわいいなどと、なんのつもりだとジト目でむ。だがアビィはそんな視線はどこ吹く風と気にもしない。

#　ゲノムとの戦闘で手札不足を感じていたところである。メノウは教典をフードマントの下にある、ハイソックスを吊り上げるためにお腹回りで固定してあるベルトに挟んでおいた。こうしておけば、両手を空けて教典魔導が発動できる。

#　教典は複数の魔導が行使できる便利な魔導書だ。『遺跡街』に来てから、何度も教典があればと思うことはあった。これを使わない理由などないと受け取って、なにかが胸に引っかかった。

#　ない、はずだ。

#　ただ、教典を捨てた時、なにかあったような気がする。大事な、なにかが。

#　思い出せないことに、メノウは慣れてしまいつつあった。

#「まあ、手段が増えてありがたいからいいけど……」

#「魔導の発動媒体の機能だけ活かしてあるから安心して。それを持っててもこっちの情報がハクアに筒抜けになったりしないよ。……お、妹ちゃん、みーっけ。頑張って戦ってる！」

#　贈り物などと言いつつも自分が渡した教典には興味がないのか、天井の街並みを見ている。目を凝らしてみれば、黒い点に近い大きさの人影が立ち回っている様子が見えた。天井までは千メートル近くある距離で、よく見つけたものである。

#「……ふざけてる場合じゃないでしょ」

#「うん、ごめんね。確かに、ふざけている場合じゃなかったね。そろそろ結論を出さないと」

#　思わぬほどに真面目な同意が返ってきて、むしろ戸惑う。

#　そういえば、先ほどから不自然なほど敵の姿が見えない。上ではサハラたちがあれほどまでに追い回されているのに、だ。

#「ね、メノウちゃん。どうして私が『絡繰り世』を出たのか、覚えてる？」

#「……サハラに会いに来たんでしょ？」

#「それはそう」

#　間違っていなかったらしい。

#　アビィはうんうんと力強くく。サハラが聞いていたらの全肯定っぷりに逆にえそうだ。

#「本当はあのまま妹ちゃんを『絡繰り世』に持って帰っておきたかったんだけどね。メノウちゃんたちもいたし、人間のフリして旅回りするのは都合がよかったから、そのまま視察していたんだ」

#「視察？」

#「うん。おねーさんは年長者だからね。結界に穴が空いて三原色も外に出られるようになった時に、真っ先に外に出たの」

#　長らく『』からが指一本も出せなかったように、白夜の結界に囲まれた『絡繰り世』から脱出できる魔導兵は等級が限られていた。出られて、二原色まで。知性がある魔導生命体である三原色は、『絡繰り世』こそが唯一の世界だった。

#「こっちの世界には私たちと共存できる人間はいるのか？　どうしても残さなきゃいけないものはあるのかな？　貴重な素材は？　文化は？　思想や社会は？　選定しなきゃいけないものは、いっぱいあったよ」

#　アビィが指を順番に折っていく。

#「なんで、いまさらそんなことを話してるの？」

#「メノウちゃんって、『遺跡街』の空間が崩れるとヤバいって話は聞いた？」

#　メノウは眉をめた。実のところ、メノウはまだ聞いていなかったのだが、すぐに察した。

#　もしも環境制御塔と『』の中心核が融合した場合、空間振動によって白濁液が弾け飛んで降りそそぐ。環境制御塔が『星骸』の中心核を貫いて破壊し、他の六つの星も墜落して北大陸全域がの大災害に襲われる。

#「なら、止めないと──」

#「じゃあさ」

#　アビィがメノウのをった。

#「『絡繰り世』を閉じ込める白夜の結界がなくなったら、どうなると思う」

#「──は」

#　声を失った。

#　東部未開拓領域『絡繰り世』は疑いようもなく、世界で最大面積の亜空間だ。【器】のから吐き出され続けるを糧にして、原色で構成される空間は膨張し続けている。封印されているからこそ、ここ『遺跡街』のように内部の空間が広がり続けているのだ。

#『絡繰り世』を閉鎖環境たらしめている白夜の結界が壊れたら、どうなるのか。

#　答えは、すぐに出た。現象自体は『遺跡街』で起こりうることと大差ないため、おそらく正解であろう単純明快な答えがわかってしまった。

#「空間交錯が、起こる……？」

#「うん」

#　アビィはやかに頷く。

#　さらにはメノウが恐れるあまり口にしなかった重大事項を告げる。

#「大陸規模の、ね」

#　そう告げたアビィの口元は、うすくんでいた。

#　ぞわりとメノウの胸に不快感がい寄る。

#　原色概念によって拡張された亜空間が何らかの要因で消え去り、そこに存在していた物体が元の空間にあった物体と重なることによって起こる交錯現象。二つの空間が統合される時に、ある現象が起きる。

#「空間交錯の際に重なっている物体って融合するんだけど、その際に質量に応じた衝撃を発生させるのも知ってる？」

#「……知ってるわ」

#　ぞわり、ぞわりと悪い予感が膨らんでいく。

#　白夜の結界によって空間が閉ざされた『絡繰り世』の規模は、ここ『遺跡街』とは比べ物にならない。地表をう形で拡大していき、千年かけて広がり続けた面積は、いまや人類が住んでいる大陸にする。

#「もしも白夜の結界が壊れたら、私たちが住まう閉鎖環境は解放される。長年をかけて拡張していった『絡繰り世』はいまある大陸の地表と重なって……空間交錯の衝撃で、大陸自体が弾けちゃうんじゃないかなぁ」

#　声が、詰まった。

#　そんなバカなと笑い飛ばそうとして、できない。メノウたちが地下に来てから考えていたのとはまったく別の脅威を聞かされて、とっさに頭が回らない。

#「待って。それは、『絡繰り世』の結界が解除されたら、よね」

#「うん。そうだね」

#「されない、わよね？」

#　救いを求める声に、アビィは微笑むだけで返答しない。

#『絡繰り世』を閉じ込める結界は、千年の間、維持された。そしてこの一年で、『』と同じほどに軋んでんだ。

#　人類にとって最悪なことに、『絡繰り世』に住まう魔導兵にとって、いまアビィが並べ立てた未来は必ずしも悪いことではないのだ。

#「たぶん、この方法だけなんだよ。私たち魔導兵がから始まった魔物たちをさっぱりっに消滅させられるのって」

#　二つの空間が融合する衝撃は大陸を砕く規模になる。一つの世界の破滅と引き換えに、アビィたちは宿敵を滅することができるのだ。

#　だからこそ、結界に穴が空いた時に真っ先に彼女自身が出てきたのだ。

#　かつて結界が軋みはじめた時、アビィたちは遠くない未来にその現象が起こることを予見し、空間交錯が最小限である上空に逃げるための方舟の構築を急いだ。空間交錯の際に発生する衝撃は物体同士が重なった時に生まれる。巨大な物体がない上空は、比較的安全な地帯なのだ。

#　幸い、幾度となくループを繰り返している間に、避難先となる方舟は出来上がった。

#　あとは、乗せるものを決めるだけだった。

#「それでね、メノウちゃん」

#　後ろ手に組んで、アビィが問いかける。

#「結界を軋ませた純粋概念って、なぁに？」

#　わかり切った問いを、メノウに問いかける。

#「……」

#　じり、とメノウのが後退の音を立てた。サハラの忠告が、いまさら頭をよぎる。

#　を封じる結界を軋ませたのは、いまメノウもアカリを介して行使している【時】だ。

#　もしもアビィが白夜の結界を壊したいと考えていた場合、どういう行動に出るか。

#　逃亡も視野に入れたが、背後からも気配が現れた。

#「わかっただろう、アビリティは結論を出したんだ。お前ら人類は、わざわざ救う価値がねえ、ってな」

#　後ろから、ゲノムが現れた。

#　そういえば、ととした思考が考える。

#　ゲノムも長らく『絡繰り世』にいた一人だ。メノウがアビィと合流してから、一度も襲撃を仕掛けてくることがなかった。

#　この二人は──どこかで、内通していたのではないか。

#「これからは魔導兵の時代が来る。いや、もう魔導兵なんて呼ばれることもねえ！　世界で唯一の知性体として、覇権を握ってできるんだ！　人類がつくる文明なんかより、よっぽどまともな世界になるだろうよ」

#　人類社会に失望しきった男は、世界の今後を左右できるアビィに自分の感情をぶつける。

#「早く滅ぼそうぜ、こんな世界は。【世界回帰】と【世界停止】で、白夜の結界は緩んでいる。それこそ、あと一息で崩れそうなほどにだ」

#　ゲノムがメノウを指差す。

#「てめえを追い詰めて【時】のに叩き戻せば、なにもかもお終いだ。世界が原色空間に支配されるのは、俺にとってもすこぶる都合がいい。ミシェル？　シラカミ・ハクア？　知ったことかよ。そんなもの、全部吹き飛ばしてやろうぜ！　なあっ、アビリティ・コントロール！」

#　四大を押さえつける二つの結界は、あと一度の【世界停止】に耐え切れるかどうかも怪しい。

#「ぜひこの場で、俺との盟約を結んでくれよ。俺と一緒にそこの『』の弟子を詰めれば、になるぜ。くだらない世界は、それで終わる」

#「そうだね、ゲノム」

#　ゲノムの言う通りだ。アビィの弟妹たちだけのことを考えれば、白夜の結界を壊してしまったほうがいい。

#　人類の文明は負の遺産を含めてが消え去り、原色概念だけが魔導体系として残る世界ができあがる。世界の仕組みがまるきり入れ替わる。そこにはも、原罪魔導もない。

#　そんな理想郷を脳裏に思い描きながら、アビィはなくゲノムを殴り飛ばした。

#「──え？」

#　予想外の行動に、メノウは立ち尽くす。

#　完全に油断していたゲノムは、とんでもない速度で吹っ飛んだ。あっという間に視界から消える。アビィが、くるりと振り返ってメノウと目を合わせる。

#「メノウちゃんたちと一緒に世界を回ってわかったんだけどさ」

#　いままでの旅路で、誰一人殺すことがなかった魔導兵は困ったような笑顔を浮かべる。

#「私はこの世界のこと、大好きみたいなんだ。なに一つ、壊したくないくらいに」

#　聞かされた内容の意外さに、メノウはぱちぱちときをしてしまった。

#「アビィ……あなた、ほんとにちゃんと、私たちの味方だったのね」

#「うわん、まだ疑われてたんだ。謝罪と賠償を要求したいよ！」

#　いつも通りの態度に、ほうっとメノウの全身から力が抜ける。

#　アビィの軽い態度に、本心が見えなかった。無根拠な友好的態度に納得がいかなかった。

#　けれども、なんてことはない。彼女は純粋に人類に対して好意を抱いて、まぎれもなく、ただの善意でここまでメノウたちに協力をしてくれたのだ。

#「そうね……どうやってお詫びすればいいかしら」

#「じゃあ、熱烈なハグして───わっ!?」

#　言われた通り抱きしめたら、なぜか驚かれた。してやったと笑顔を浮かべ、抱擁を解く。

#「一緒に行くわよ。あの環境制御塔まで」

#「うん！　いまのハグで、やる気出た！」

#　導力強化のを残して、メノウとアビィは駆け出した。

#

#　吹き飛ばされた先で、ゲノムが起き上がっていた。

#　人を殺さないというアビィの徹底具合は、部下の肉体を端末代わりにしている彼にすら適用されるらしい。

#　深く、深く息を吐く。

#「そうか」

#　の底から吐き出されたのは、失望のため息だ。

#　ではない。失意はすれども、世界を滅ぼせるチャンスを逃すほどの事態ではないからだ。

#「残念だ。『絡繰り世』に救ってもらった俺が、区長の一人を壊さなくちゃならないとはな」

#　ゲノムは自分の顔から、拳銃を取り出す。上空に向けて、発砲した。

#　信号弾だ。

#　遺跡街にいる部下に、詰めの指示を出す。お遊びは終わりだ。流通を目的としない、ゲノムが占有している攻撃手段も使用を解除する。

#「こんなくだらねえ世界を滅ぼすなんて、簡単さ。お前を壊したあと、俺は区長のらにこう連絡すればいいんだからな」

#　次はいらない。

#　ここで、世界を終わらせることができるのだ。

#「人類との和平を唱えたアビリティ・コントロールを、人間どもは愚かにも信用することなく討伐しちまいました、とな」

#

#　上下に広がる遺跡街の街並みの中間部で、光がいた。

#　信号弾だ。メノウは少数での行動が前提の上、教典で通信できるために使わなかったが、広範囲に合図を送るのに有用な手段である。

#　ゲノムがこの街にむ自分の部下に指示を飛ばしたのだろう。いまの状況から、内容はおおよそ予測できる。

#　部下全員で、メノウたちを殺しにかかってくる合図だ。

#　メノウは勢いよく地面を蹴った。

#　導力強化を全開にした踏み込みに、ぐんっと体が加速する。三歩進んで、すぐに道なりに進むのがもどかしくなった。一歩で大きく跳躍。ビルの壁に着地をした反動でをたわめて、ぎゅぅっと足裏にまった力を解放する。

#　反動で、壁面がひび割れた。

#　ビルとビルの壁を跳躍し、疾風のように駆けていく。

#　横には、アビィが付いてきている。

#　笑みがれる。不思議と解放された心持ちだ。抜け落ちたものが、ぴたりとはまった感覚すらする。

#　だがこの遺跡街には多数の敵がいる。

#　前方の建物の屋上に、敵影。二人だ。どちらも両腕が導力義肢になっている。

#　接敵まで、あと二秒。

#　メノウの動きをギリギリに引き付けて、肉薄。敵の動きは鋭かった。着地の隙をって、導力義肢となった両腕を振り下す。

#　メノウは着地と同時に体をひねって、に飛び込んだ。敵の両腕が背中の後ろを通り過ぎる。

#　互いがほぼ接触している間合いで、メノウは右手を振るう。

#　空中に、鮮血が飛び散った。

#　殺しはしていない。だが戦闘復帰は難しいだろう。高速で移動するメノウたちに追いつくのは、もっと無理だ。

#　終わった戦闘には見向きもせず、メノウは跳躍した。ゲノムの直属でも、いまのメノウの動きについて来られる人間は多くない。散発的に導力銃の発砲音が響くが、どれもメノウをえることなく無為に弾痕をつだけだ。

#「へいへーい！　上で妹ちゃんに構っている場合じゃないよぉ！」

#　アビィがやたらと楽しげに叫んだ。ゲノムは大声で叫ばれた挑発に乗った。メンツや感情的な行動ではなく、メノウたちを止めるのに純粋に戦力が足りないという判断だろう。

#　天井区画で、が起こった。

#　一度ではない。続け様に二度、三度と爆発音が響く。メノウたちの進行方向を狙ってビルが落下してくる。天井区画にいるゲノムが、建物を破壊して墜落させているのだ。おそらくは『遺跡街』を占拠したのと同時に、防衛用に仕掛けを作っていたのだろう。冬場に邪魔なでも落とすように景気よく建物が墜落する。

#　雨あられと落下してくる群を避けながら駆け抜ける。背後で丸ごと一軒の平屋が墜落。く地響きに追い立てられるように進む。

#「……アビィ？」

#「ここまでやるとは思ってなかったです……」

#　天が落ちて来るような騒乱の間をって進む中、メノウがじっとりと湿った声で責めると、アビィは素直に謝った。

#　そのメノウたちの上部に、影が差した。

#　天井区画にあった中でも大きな建造物──『駅ビル』が、落ちてきたのだ。

#　この周辺にはゲノムの部下もいるだろうに、まったくの構いなしだ。短剣銃を上に向けようとしたメノウの手を、アビィがそっと押さえた。

#　落下してくるビルに向け、アビィが両腕を伸ばす。

#『導力：素材併呑──原色ノ理・擬似原色概念──起動【原色種：蟷螂ノ斧】』

#　アビィが、カマキリによく似た形になった腕を振るった。

#　その一閃は、おそらく音速を超えていた。高さにして数百メートルはある建造物が左右真っ二つに切り裂かれ、切り口から衝撃波で吹き飛ばされ、メノウたちの進路だけを譲るように地面に落下する。

#　音が、轟いた。

#　耳をバカにしてしまいそうな大音量。まともに立っているのも難しいほどの地響き。そのどちらにもひるまず惑わされることもなく、メノウとアビィはまっすぐに駆け抜ける。

#　もうすぐ、環境制御塔に到着だ。

#　だがやはり、メノウたちの目的地を知っていれば待ち伏せする知恵はあった。

#　環境制御塔の均された周辺に、十数人の武装集団が集まっていた。おそらく、ゲノムの直属の中でも最精鋭。一番に襲いかかってきた者たちより弱い人間は、一人もいないだろう。

#　メノウは躊躇しなかった。

#　敵陣にまっすぐに突っ込む。敵の一人、義眼の人物から魔導発動の気配を感じた。

#　対抗するため短剣に導力を流し、敵集団の上部を狙って山なりに投擲した。

#『導力：接続──短剣・紋章──発動【導糸】』

#『導力：素材併呑──義眼・内部刻印魔導式──起動【スキル：石化の蛇眼】』

#　原色概念による、物質変換。緑色の導力光が到達する前に、導力の糸を経由して【力】を流す。

#『導力：接続（経由・導糸）──短剣・紋章──遠隔発動【疾風】』

#　ちょうど義眼の敵の真上で回転していた短剣が、【疾風】の推進力で直下へと方向転換した。

#　直前で勘づいた敵が首をそらし、肩に刺さる。倒すまではいかなかったが、高度な集中がいる魔導は中断された。

#　メノウは、自分の短剣を追うようにして、敵の集団の中心に着地した。

#　一斉に銃声が弾けた。ゲノムが持っていたのと同じ導力銃だ。同士討ちをするような愚は侵さず、計ったタイミングでメノウが動きを止めた瞬間を狙いちにする。【多重障壁】では耐えきれない密度の弾幕だ。

#　だが、いまのメノウは黄色のフードマントの下に、教典を持っていた。

#　背中のベルトに挟んだ教典が、導力光の輝きを放った。

#『導力：接続──教典・二章五節──発動【ああ、敬虔な羊の群れを囲む壁は崩れぬと知れ】』

#　大口径拳銃も含め、展開された防護壁を傷つけることはできなかった。

#　メノウは再び、教典に導力を流し、もっとも手慣れた魔導を放つ。

#『導力：接続──教典・三章一節──発動【襲い来る敵対者は聞いた、鳴り響く鐘の音を】』

#　教典から立ち上る導力光が、教会の鐘を形成した。

#　しかし相手も百戦練磨。即座に魔導構成を見破り、一斉に散開して回避をしようとした。

#『導力：素材併呑──三原色ノ理・擬似原色概念──起動【原色種・青蜘蛛】』

#　敵が動くよりも早く、アビィが擬似概念を行使した。大型の魔導兵が展開されて、男たちの動揺を誘う。魔導展開から発動までタイムラグがある教典魔導のを埋める足止めだ。

#　ほんの一瞬、敵集団の動きが止まる。

#　それが、致命的な結果をもたらした。

#　導力の鐘が鳴る。

#　一鳴。抵抗し損ねた数人が、頭を抱えて倒れる。二鳴。響く導力の波動に耐え切れず、手足の血管が破裂する。三鳴。一人残らず、意識を保つことはできなかった。

#　一発の魔導で、十数名をまとめて昏倒させた。

#「こんなもんね」

#「いえーい！」

#　敵を鮮やかに無力化したメノウは、アビィのハイタッチに応える。

#　戦闘開始から終了まで、三十秒もかかっていない。

#　メノウはアビィと来た道を確認するが、敵の増援の気配はない。いまので最後。後方にいた集団は、建造物の落下に巻き込まれたのと、瓦礫の山となった道に苦戦しているのだろう。

#　二人は環境制御塔を見上げる。

#　間近で見ると、よりその大きさを実感できる。

#　目指すは、上だ。サハラたちと合流し、端末をっているゲノムの本体を倒し、を退ける。そのために環境制御塔の内部へ侵入しようとした直前で、二人は足を止めた。

#「なに、あれ」

#　遺跡街の空ともいえる、天井区画。

#　そこに、見過ごすことができない異変が発生していた。

#

#　時は少しさかのぼり、アビィがゲノムの提案を蹴り飛ばす前。

#　天井区画を、こそこそと進む人影があった。

#　サハラたちである。彼女たちはノノの先導に従って、上下逆の街並みをこそこそと進んでいく。やたらと遠回りを指示されたものの、あれからは一度も敵に遭遇していない。

#「ノノってさぁ」

#　少し緊張感が緩んだ中、マヤが責めるような口調でノノに語りかけた。

#「計画立てる時って、絶対に秘密を抱え込むよね。どうして？　人をすのが趣味なの？」

#「どうしてっていうのは、なにを質問しているのか自分でわかってるかな？」

#　はぐらかした答えに、マヤの視線が鋭くなる。

#　未来を見通すことができる彼女は平然と隠し事をするし噓もつく。自分の目的のために人をよいように動かすための手段を選ばない。

#「だって……こうなることが、わかってたんでしょう？」

#「おやおやおやぁ？　マヤったら、ボクが映画館で変な人に襲われることも、メノウ君と分断されることも、サハラ君がなんかいことになることも予知済みだったっていうのかい？」

#「は？　なんか面白いことってなに？」

#「ノノは、昔からそういう奴じゃない。知ってたんでしょ？」

#「ねぇ。私、なんか変なことになってるの？　どういうこと？」

#　聞き逃せない台詞にサハラが訴えるが、二人はスルーする。

#「まあ、知ってたよ。マヤの言う通りさ！」

#　もったいを付けたくせに、ノノはあっさりと認める。

#「あの変なやつが襲いかかってくることも、あたしたちがメノウと分断されることも？」

#「うん」

#「なら、最初っから教えてくれてもいいじゃない」

#「あはは、昔から変わらずお子様だなぁ、マヤは」

#　マヤの非難を快活に笑い飛ばすノノの笑顔には、未来視を使って人を騙した罪悪感なども見当たらない。きらきらと瞳に浮かぶ星型の導力光を輝かせる。

#「事件を起こすまでもなく事前に解決してしまったら、天才美少女たるボクの出番と活躍がなくなってしまう──噓だよ！　ジョークに決まってるだろ!?」

#　無言のまま導力光で目を赤く光らせて魔導発動の体勢に入っているマヤを見て、慌てて前言を撤回する。

#「何度も言ってるし、いまは理解してもらえないことを前提に言うけどさ。ボクは、こうするしかなかったんだよ。いま以上が視えないんだ」

#「……わかんない。ノノは、いつもそればっか」

#「わかってもらおうだなんて思ってないさ。これはボクの自己満足で、に終わるかもしれないことだからね」

#「それは──」

#　どういうことだ。この先のために、いまの自分たちを犠牲にするつもりなのか。マヤが追及しようとした時だ。

#　急に周囲の建物が途切れた。人工的にされた真っ平らな地面が続いている。

#　その先にある建物は、『遺跡街』にある他のどの建造物よりも巨大だ。

#　環境制御塔。

#　この地下空間を人が住める環境に調整している最重要機関であり、メノウが『星骸』の管理権限を奪取するために目的地としていた場所にサハラたちもたどり着いた。

#　見晴らしがよく、もない。近づく影があれば、さぞかし目立つことだろう。

#「環境制御塔の周辺は、当時の条例で建築物の建造を禁止したんだ。テロ対策もろもろでね。安心してくれたまえ。当時の警備システムはもう起動していない。とっくの昔に停止している」

#「建物は当時のままなのに、そういうシステム関連は維持しなかったの？」

#「そこまで任せにすると、経済が回らなくて……あんまり細かにで固定すると発展性がなくなるんだよね。欠点も多いんだよ」

#「ふうん？」

#　マヤはよくわからないと首をげる。一方でサハラは不安感を膨らませていた。

#「確かに、当時の警備はないんでしょうね」

#　古代文明当時の警備はないのだろう。それに関しては素直にありがたい。超文明の重要施設を守る警備システムが甘くできているはずがないのだ。そんなものに挑みたいと思うほど、サハラは好戦的でもなければ自分の力量に自惚れてもいない。

#　だがいまの環境制御塔は、むしろテロリストに占拠されている状態なのだ。

#　サハラは改めて下方に向かって伸びている環境制御塔を見る。

#　入り口までの四方が完全な平らだ。環境制御塔からは、さぞかし見晴らしがよくなっているだろう。ネズミが走っても見逃すことはなさそうだ。

#　狙撃とか、とてもしやすそうだった。

#　サハラは、にこっと笑ってノノの背中に手を添える。

#「よかったらノノ。先頭を歩いてみる？」

#「なんだい、突然。先頭の栄誉はもちろんボクにしい──やっぱめた」

#　歩いた後の数秒後になにが見えたのか、踵を返す。

#　どうやらサハラの予想通りだったらしい。

#「よし。どこから狙撃された未来が見えた？　詳しく教えて」

#「あっ、その態度！　君、ボクをにするつもりだったな！　なんてひどいことをするんだい！」

#「いいからとっとと前を歩きなさいよ、ノノ。そのくらいしか役に立ちようがないんだから」

#「マヤが冷たい！　ボクはショックだぞ！　あ、ちょ、やめ……にゃーぁがぁ!?　いま頭がパーンってなる未来が……そっちはダメだから押さないでくれたまえよぉ！」

#　けたたましい悲鳴はいっさい考慮することなく、サハラたちはノノを盾にして前に進んだ。

#

#　ノノを盾にして進むこと、百歩ほどでサハラたちは環境制御塔の入り口に到着した。

#「……ボク、ここまで粗雑に扱われたのは初めてだ。ボクってすごいんだぞ」

#　何度も自分の頭が撃ち抜かれる未来を見せられたノノにはの様子が見られた。しくしくと落ち込んでいる態度が演技ではないのが面倒さに拍車をかけている。

#　だが同行者たちに同情の色はない。

#「あっそ。千年前は周りのみんなが優しかったのね」

#「昔のあたしに言ってやりたいわ。もっとこき使えって」

#「やめてくれよぅ」

#　二人の冷たさにノノはねた口ぶりをしながらも立ち上がる。

#「なんにしても、到着だ！」

#「本当に行くの？　この三人で？　あのゲノムとに挑みに？」

#「行く」

#　マヤは迷いなく頷いた。サハラの憂鬱がずんっと重みを増した。

#「は、あたしの一部だもの。メノウが『星骸』を手に入れるためにも、あたしがなんとかするの」

#「……私にメリットは？」

#「サハラはあたしの下僕でしょ」

#　マヤは、はっきりと言い切った。

#　サハラのめが付いたのを見計らって、ノノが手近な壁をコンコンとノックする。

#「サハラ君。ここを壊してくれたまえ」

#「はいはい」

#　もはや逆らう理由もないと、サハラは導力義肢を構える。

#『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル：導力砲】』

#　導力義肢から放たれた導力光が壁をぶち抜く。

#　土煙が晴れた先には、肉の塊があった。

#　構造物が、有機物へと変換されつつある。鼓動を脈打ち、生命の兆しを見せていた。

#　肉壁となっている壁から触手が生えて、まっさきにマヤをめ取ろうとした。とっさにったサハラの右腕──導力義肢に絡みつく。

#「ちッ！」

#　舌打ちを飛ばしつつ、サハラが腕を振るって、無理やり引きちぎる。

#　幸い、異常はない。侵食くらいはしてくると思ったのだが、純粋に物理攻撃だけを仕掛けたらしい。

#「さ、サハラ。大丈夫？」

#「平気。強度は、大したことない」

#　改めて、周囲を観察する。

#　まるで巨大な生物の体内だ。というより、文字通り体内なのだろう。環境制御塔の入り口部分を一匹の巨大な魔物と化すことで、侵入者を捕食するトラップにしたのだ。その証拠に、横では巨大なナメクジのようにうねる肉塊に半ば取り込まれてジタバタしているノノの姿がある。

#　危険な空間だ。

#　サハラとマヤは顔を見合わせて頷き合う。

#「二人で通じ合う前に、ボクを助けてくれないかなぁ!?」

#　もがいていたノノは自力で脱出していた。初手でサハラが簡単にちぎれたことといい、この肉塊の強度はさほどでもないようだ。

#　マヤが、チッと舌打ちをする。

#　生意気な言動はあれど、ここまで毒が強いマヤも珍しい。よっぽどノノの言動には腹を据えかねているらしい。

#「性能低い……。あたしより弱いのはどうかと思うわ」

#「さっきも言ったじゃないかい！　この体は戦闘用じゃないからね。演算専門なんだよ」

#　ぱんぱん、と汚れをいて落とす。嫌味が効いた様子はない。

#「それで、中に入ったけど。どうしたいの？　もうそろそろ教えてくれてもいいんじゃないの？」

#　ここまで振り回されながらもマヤがノノに助言を求める理由は、たった一つ。

#　は、間違えないからだ。

#「うむ。よくぞ聞いてくれたね、マヤ。君が強くなっていて、ボクは誇らしいよ」

#　胸を張る。メンタルの強さに関しては、突出したものがある。

#「内部からゲノム君がいるところまで侵入！　この『遺跡街』を不当に占拠するゲノム君をね除け、打倒するんだ！」

#「へー」

#　ノノからシンプルな作戦を聞いて、サハラは間延びした声を上げてしまう。

#「この三人で？」

#　ここにいるのは割と普通の戦闘力を自負するサハラと、四大のくせに大した力を持たない足手纏い一号と二号だけだ。

#【時】の純粋概念を操るメノウも、原色概念の最高傑作たるアビィもいない。

#　明らかに決定打を欠いた状況でゲノムに挑めというのだ。

#　笑顔のままノノが頷く。

#「いけるいける！」

#「帰ります。さようなら」

#「待ちたまえ」

#　敬語でを返したサハラの肩を、がしりと摑む。

#　サハラは迷いなく振り払った。

#　当たり前だが、敵の本丸の防御が手薄なはずがないのだ。

#「大丈夫！　大丈夫だから！　いま敵、ほとんどいないから！　メノウ君とアビィちゃんが引き付けてくれてるんだ！」

#「ゲノム本人がいるでしょ!?」

#「君なら勝てるよ！　いや、ほんと！」

#

#　入り口でのひと悶着のあと、サハラはノノの案内に従って内部を進んでいた。

#　階段を降り、扉をくぐり、時に壁を破壊して進む。目的地まで、一度として敵と出会うことはなかった。というより、人がまったくいなかったのだ。

#「なんか……逆に不気味」

#　マヤのきに、内心で同意する。普通に考えて、内部を防衛していないのはおかしい。

#「下でメノウ君たちが頑張って引きつけてくれてるからね。ほら、いまの爆発音聞いた？　あれ、天井区画の建物落として攻撃してるんだぜ」

#「そんなことしてるの？　こっわ」

#　外で行われているらしい大規模な攻防にきながらも進んでいくうちに、環境制御塔の制御室にたどり着いた。

#「ほんとに着いちゃった」

#　肩透かしだと、マヤが呟く。

#　サハラは取っ手に手をかける。扉に、はかかっていなかった。

#　制御室に入ると、そこには大量の導力銃と──人間の義体が並んでいた。

#　悪行が並ぶゲノムの逸話の中でも、一つだけ好意的に語られるものがある。

#　彼は、導力義肢の入手ルートを持つ唯一の人間だ。

#『絡繰り世』に行くことができない人間たちにとって、ゲノムが卸す導力義肢は、自分たちの肉体的な欠損を埋めることができる魅力的な商品である。それをどのように生成しているのかは、謎に包まれていた。

#　導力銃と、導力義肢。うず高く積まれるゲノムの代名詞とも言うべき物品の中心に、に座った一人の男がいた。

#「よぉ」

#　おそろしくせ細った男だった。生命維持のためか、巨大な車椅子から伸びた多様な管が男の体と繫がって一体化していた。体中に古傷があり、右腕と両足が欠損している。なにより痛々しいのは、彼の顔面に刻まれた巨大な傷跡だ。

#　脳を損傷しているだろうと一目でわかるほどに、右の顔面がれている。

#　生きているのが不思議なほどの傷だ。彼の体につながった管を一本でも引き抜けば、五分と保たずに死亡するだろうことが見てとれた。

#「ゲノム・クトゥルワ……？」

#　サハラは半ば信じられない気持ちで問いかけた。

#「ああ、そう、だ……ぜ」

#　その肯定に、なぜかサハラはショックを受けた。

#　彼こそが、ゲノムなのだ。

#　くつくつと肩を震わせて笑う所作にすら、死を感じる。言葉を発するという行為の反動で、いまにもぽきりと折れて砕けてしまいそうだ。

#「笑える、だろう……？　これ、は、ぜんぶ……『』にやられたんだぜ？」

#　彼が『』と相対したのは一度や二度ではない。

#　何度も彼女の暗殺をかいり、逃げ惑っては致命打に近い傷痕を刻まれた。

#　そうしながらも、生き残り続けた。

#「その結果、が、これだ……」

#　彼が、左手で自分のなくなっている右腕部分を指さす。よくよく見ると、欠損しているゲノムの肉体を埋めるようにが集合している。義肢を作ろうとしているのだ。

#　だが適合しないとでもいうかのように、ごとりと重い音を立てて、床に落下した。

#　一つ、また義体が積み上げられる。

#「この義体、な……おれにだけ、くっつかねぇんだ。調整、すれば、ほかの人間に、は、つくのになぁ……」

#　サハラは、思わず自分の銀腕を抱える。

#　痛ましさに見ていられずに視線をらす。ゲノムの前には、数多くの導力光でできたモニターがあった。その一つ一つが、端末としてのゲノムの視界を映している。彼が導力義肢を通して十年で寄生し続けた人々だ。

#「それが、あなたが多人数になる秘密？」

#「ああ……が満ちている空間でしか使えない……がな……」

#　話すのも苦しいのか、彼の口かられる言葉は途切れ途切れだ。

#　ゲノムが『絡繰り世』から出て来られなかった本当の理由を悟る。彼の能力同様、生命を維持している装置もで作動している。彼の一部になるはずだったのに、導力的なバグによって適合されなかったものを素材として改造した物なのだ。

#　ゲノムは結界に閉じ込められたのではない。

#　原色概念で構築された空間でしかゲノムは生きていけないから、十年もの間『絡繰り世』に引きこもり続けたのだ。

#　過去に【光】の純粋概念を巡る『』との攻防で今度こそ死んだと思ったゲノムは死を覚悟して『絡繰り世』に転がり込み、結果として得たのが疑似的な【憑依】による自己増殖だ。

#『』にやられた脳を補完する際に、なんらかの不具合が生じたのだろう。過去の実験が関係している可能性もある。

#　なんにせよゲノムは、【憑依】による魂の分割が可能となったのだ。

#「おま、え……らは、ほんとうに、ふざけ、やがっ、て。そう……その腕、のおまえ、だ」

#「……私、なんかしたっけ」

#「とぼけ、んな。バラル砂漠の時も、じゃま、しやがって……」

#　言われて、思い出す。

#　サハラがメノウと敵対していた時に起きた事件だ。あの時も、ゲノム直属部隊の一つである『鉄鎖』は『絡繰り世』へつながる空間の穴を開けようとしていた。理論的には、遺跡街に開いた空間のつながりと同じだ。儀式魔導によって原色空間をつくり、ゲノムが生存できる場所を増やそうとした。

#「あの時はメノウがやったことだから、私のせいにされても」

#「うる、せ……結果、てきに、かわんねぇよ」

#　確かにサハラが途中で鉄鎖を裏切り、メノウとアーシュナに攻め込まれたことによって中央砂漠地帯に『絡繰り世』とつながる拠点をつくる計画は打ち砕かれた。

#　サハラがいてもいなくても計画は失敗しただろうから、自分に責任などないというのは紛れもなく本音だ。

#「まあ、いい……それ、は、いいんだ、よ……」

#　ゲノムが残った左手を振ると、端末の視界を映していたスクリーンが消え失せる。

#「穴は、ここに、ひらいた。それで、いいさ。お前らを、ここまでいれたの、は……直接、ぶち殺したかった……んだよ」

#　なぜか、悪寒がサハラの全身を貫いた。

#　相手は立ち上がることすら自力でできない人間だ。

#　無力だというのに怯えのないゲノムの姿勢がサハラの生存本能を刺激した。

#『導力：素材併呑──義腕・内部刻印魔導式──起動【スキル：杭打ち】』

#　サハラが自分の手持ちの中でも最大の手札を切ったのは、本能的な恐れによるものだった。

#　初手不意打ちでの最高威力で攻撃した選択は正しく、そして無意味だった。

#「はしゃぎ、やがって、よぉ……このおれの、ざま、みて……かてる、って、思っ、たんだろ」

#　サハラの攻撃を受け止めたのは、床に散乱していた義体だった。数々の義体が組み合わさって動き出し、巨大な手となってサハラの攻撃を受け止めた。

#「死ねや、クソアマども」

#　ゲノムの義体が隆起し、雪崩を打って襲い掛かってきた。

#　逃げようにも、逃げ場などなかった。この部屋は一面にゲノムの体を補完するために造られた義体が大量に転がっている。肉体につながっていないというのに、一つ一つがゲノムの意思に呼応して動いてサハラたちを取り囲む。

#　大量にある義体のうち集合した義眼がき、サハラたちの動きを追う。

#『導力：素材併呑──義眼・内部刻印魔導式──起動【スキル：灼熱の魔眼】』

#　空中に、が生み落とされた。

#　──ノノは、この未来を見ていたのだろうか。

#　必死になって炎を避けているサハラの脳裏に浮かんだ疑問の答えが出る前に、後ろから衝撃を受けて突き飛ばされる。

#　サハラを突き飛ばしたのは、ノノだった。

#　一瞬前までサハラの位置にいたノノの体が、上半身と下半身で泣き別れになっていた。義眼が生み出した炎をましに、背後から義手が襲い掛かってきていたのだ。

#　とっさにノノの上半身を摑んで胸に抱き寄せ、全力で部屋の外を目指す。捨て置かれたノノの下半身が、ミキサーにかけられたようにになる。

#　大気が裂けた。裏拳の軌跡が風鳴り音を立ててサハラの側頭部を跳ね飛ばした。きりもみ状態で空中に飛ばされ、壁に叩きつけられる。

#　希望があるとすれば、マヤだ。

#　原罪概念。触れれば一方的に浸食されかねないという優位性から圧倒的な優位を誇るがゆえに、大量の義体はマヤを避けて通っていた。

#「ノノ、サハラ！　いまぁむぐぅ!?」

#「クソガキが」

#　ゲノムのかすれ声の直後に、マヤの叫びががれた。

#「おれが……てめえの、対策、してねぇとでも？」

#　環境制御塔を浸食していた魔物が、この部屋の床に残っていた。触手を伸ばしてマヤをみにしたのだ。マヤは魔導行使の際、視線で狙いを付けるがある。ゲノムは部下から得た情報でそれを見抜いた。視界さえ塞げば狙いを付けられなくなる。かといって下手に殺してしまった場合には、どこから再召喚で復活するものかわかったものではない。そのため、最初から床に同化させていた魔物に丸のみさせて捕獲したのだ。

#　魔物に変化させる魔導も、もとから魔物であるならばなんの効果も発揮しない。マヤの判断力では、なにも見えない聞こえない状態では、どんな魔導を使えばいいかの選択ができない。

#　終わった。

#　痛みを痛みとすら感じられない衝撃に意識をとさせながら、そう思った。

#　原罪概念の対策まで済ませている。勝てる要素がない。今度こそダメだという確信的な絶望が、サハラの胸中を覆った。

#　どうせ自分なんて、そんなものだよな、という諦めがく。

#　だが。

#「──ッ」

#　負けられなかった。

#　自分が負けるのも、死ぬのも、構わない。

#　だがマヤを、見捨てるわけにはいかない。自分が生きているうちに、まだ幼く、自由で、わがままで、自分に変わるきっかけをくれたマヤを見捨てるわけにはいかないのだ。

#　なにか、道はないのか。

#　必死になって視線を巡らせて、上半身だけになったノノの指が目に留まった。

#　彼女は明確にどこかを指さしていた。その先を目でたどると、一体の人形があった。

#　人型魔導兵の素体だ。一目見て、その正体を悟った。

#　あれは、バラル砂漠で『絡繰り世』に送り返した三原色の魔導兵だ。顔がのっぺらぼうで、雌雄もない裸体の状態だが、間違えようもない。

#　あの時に入っていたサハラの魂が抜けたため、肉体が抜け殻となって『絡繰り世』に送り返され、それをゲノムが確保したのだろう。

#　なにせ、とはいえ【器】のが納まった三原色の魔導兵だ。ゲノムが手元に置いておく価値はある。

#　それが必然だといわんばかりに、吹き飛ばされたサハラの傍にあった。

#『バグめ』

#　懐かしい、魂に響く声が聞こえた。

#『あなたをあなた足らしめていた自己嫌悪はどうした。捨てたはずの自分を拾って、満足か』

#　幻聴かもしれない。それでもサハラは答えた。

#　いつの間にか、消えていた。自分を嫌いになっているどころではなかった。あんなにうらやましかったはずのメノウは意外と格好悪いところも多かった。あんなに憧れていたはずの『』が死んでも、そんなに悲しくなかった。自分より悲惨な人生なはずなのに悲観さがないマノンのような少女もいた。

#　そして。

#　マヤがいる。

#『バグめ。バグめ。あなたは自分以外のなにかに、なりたかったはずだ。強く、きれいな、お前以上の人に。バグを捨てたあなたに、いまもなれる。あなたがいる、いまならば』

#　もしここで、サハラが誰かを思い浮かべれば、その人になれるという確信があった。かつて、メノウになったように。アーシュナ・グリザリカのような強さには羨望を覚えるし、『』にだってなれるだろう。もしかしたら──シラカミ・ハクアにだってなれるのかもしれない。

#　自分を、捨てさえすれば。

#『望みさえすれば、あなた以上の自分になれる』

#　願望が、ささやく。

#　だが、いまのサハラには自分を捨てられない。どんなに無様をそうとも、かつて欲しかったもの以上の感情がある。

#　無意識なほど自然に、一つの疑問が声に出た。

#「あなたは……なにになりたいの」

#　幻聴が、止まった。

#　ああ、とに落ちた。この幻聴の心が理解できた。自分の願望をかなえるために、自分が器じゃないなんてことは、この幻聴だってわかっている。思い知っている。だから誰かの願望にすがって、誰かの願望になろうとしている。

#　ならば、言うべきことは一つだ。

#「わからないなら……あなたが、私の【器】になればいい」

#　幻聴の返答は、一拍遅れで響いた。

#『──要望を承諾、正常に処理しました。接続を開始します』

#　サハラの右腕が、目の前の素体を取り込んだ。そうとしか表現できない現象が起こった。

#　取り込まれた素体が細かく分解されていく。赤、青、緑の三原色の微粒子。いまのサハラには、感覚的に理解することができた。これが。原色概念の最小単位は、砂粒よりも細かな音を立てて巻き上がり、サハラの導力義肢となっている右腕に吸い込まれていく。

#「おい、それは……」

#　この遺跡街で初めて、ゲノムが動揺をわにした。理解不能な現象へのいら立ちをぶつけるように、大量の義体が組み合わされた拳を振るった。

#　三原色の魔導兵並みの出力ある。単純ながら必殺に近い強力な攻撃だ。

#　サハラは、茫然と自分の導力義肢を見つめていた。ゆっくりと右腕を前に出す。導力が加速していた。自分の腕の中で、無限に加速し続けていた。加速した余剰で吐き出されるエネルギーに触れて、ゲノムの攻撃を受け止める。

#　ゲノムの攻撃が、砕け散った。

#「なっ、に、をしやがった、テメェ……！」

#　ゲノムの叫びにも、サハラはいまの自分の状態を言語化できるほど理解していたわけではない。その代わりとでも言わんばかりに、上半身だけとなったノノが満足気に笑う。

#「あぁ……やっと、完成したね」

#　導力による永久機関の可否について、一つの仮説がある。

#　導力回路で永久機関をつくるには、循環する空間が三つあればいい。空間の位相差がある三つの空間をつなげてエネルギーを流すと、永遠に落下して加速を続ける循環経路ができる。逓減する以上に加速するエネルギーが生まれ、導力循環を繰り返す永久機関が完成するのだ。

#　だが、どうしても原色概念と原罪概念を結合する素材は見つからなかった。三つの空間をつなげる方法は長年研究され続けながら、千年前の古代文明ですら糸口も摑めずに机上の空論として放棄されていた。

#　だが、人間には不可能でも、二つの概念そのものが接続を望めば。

#　と化した【器】と【魔】が、ほんの一部であっても、誰かを通して共存の意思を示せば。

#　未来を知る彼女は、このために、この時代のこの場所に【星読み】として残り続けた。それでも、決してここにたどり着ける可能性は高くなかった。

#「ざまぁ見ろよ、グリザリカ」

#　ノノは【防人】と名前を変えている宿敵に、心の中で中指を突き立てる。

#　サハラの銀腕が輝き始める。過剰な導力光を纏って、恐ろしいまでに発光する。加速し続ける【力】があふれ、腕の形をした導力エネルギーそのものになる。顔をひきつらせたゲノムが、部屋にある義体をすべて自分の前に集めて盾にする。

#　サハラは、構わなかった。

#『導力：素材併呑──永久導力機関・内部刻印魔導式──起動【スキル：導力砲】』

#　サハラの銀腕からあふれ出した閃熱が、目の前のすべてを消し飛ばした。

#

#　目覚めたサハラは、ぺしぺしとマヤに叩かれていた。

#「……ま、や？」

#「よかった、起きた……！」

#　自分がどれだけ気を失っていたのか。指の一本も動かしたくないほどの疲労感が、サハラを覆っていた。体が鉛のように重い。さっきの、わけのわからない現象の反動だろう。涙で潤んでいるマヤの目元をぬぐうこともできないな、と本当に我ながらでもない感想が浮かぶ。

#　それに、まだ終わっていなかった。

#　ゲノムが、いた。

#　どうやら、サハラが気を失っていたのは一分にも満たない時間だったらしい。状況の変化は、ほぼなにもなかった。

#　だがすぐに警戒する必要もないと気が付く。ゲノムはさっきのサハラの一撃を防ぐために、部屋にあった義体のすべてを盾にしたのだろう。彼自身は命を拾ったものの、武器になるものは残っていない。導力銃はいくつか転がっているが、生身のゲノムにはそれを自力で拾いあげることもできない。

#　正真正銘、弱り切った身一つだ。

#「くそがよぉ……」

#　ゲノムが毒づく。サハラは這いずって、体を進める。導力は、ほとんど空っぽだ。一イン硬貨の紋章魔導すら発動できる気はしない。

#　ならばと、床に転がっていた導力銃を一丁、拾う。

#「さ、サハラ……？」

#「マヤ。目をつぶってて」

#　一発なら、撃てる。

#　幼い彼女に見せるものでもなかろうと思ったのだが、マヤがサハラの体を支えて持ち上げる。上半身だけ起き上がり、疲労でぼやけた焦点を合わせる。

#「俺、を……殺す、のか？」

#「ええ」

#　ひゅう、ひゅうという音が聞こえた。ゲノムが喉を鳴らして呼吸する音が、なぜかいまさらになって耳に残った。

#　呼吸するのすら必死にならなければならないゲノムの身を守るものはなにもない。だというのに銃口を突き付けられた男の視線に、死を恐れる色はない。

#「お前は……なんで、俺を殺す？」

#「私はね、ゲノム」

#　思い返してみれば、今日という一日はあまりにも不幸だった。

#「、朝食を食べ損ねたの」

#「そう、か」

#「髪は湿気でまとまらないどころの騒ぎじゃないし、考えてみれば昼ごはんも食べてないからすごくお腹減ってきたわ。おまけに、さっきのなに？　私、どうなってるの？」

#　疲れもあって適当に理由を挙げているうちに、本当にイライラとしてきた。

#　自分には世界の責任を背負いこむ理由はいらない。メノウのように他人の死を重荷にして自分を追い詰めるなんて論外だ。処刑人なんてくだらないと、いまのサハラは心の底から言えた。

#　だから、目の前の男を殺す理由は、最低最悪でいい。

#「むしゃくしゃが積み重なった憂さ晴らしに、あなたを殺させてもらうわ」

#　ゲノムは、破顔した。

#　死を受け入れた顔で、サハラと目を合わせる。

#「なら、仕方ねぇや」

#　それが、ゲノムの最期の言葉となった。

#　サハラは迷うことなく、引き金をひいた。

#　導力弾が放たれた。大口径の拳銃の反動に、サハラの腕が跳ね上がった。

#　あらゆる異名。成し遂げた悪行。人生がどれだけにられようと、死は平等に訪れる。

#　時として、あまりにもあっさりと。

#　頭を丸ごと消し飛ばす威力の導力弾によって、ゲノム・クトゥルワは、その生涯に幕を下ろした。

#「……じゃあね、私のトラウマ」

#　今度こそ、終わった。サハラの手から、大口径拳銃が滑り落ちる。

#　極度の疲労と導力を使い果たした反動に、サハラは意識を手放した。

#

#　勝利はした。

#　マヤにも、それはわかった。サハラが頑張ってくれた末に辛勝だ。だが、犠牲がなかったわけではない。

#「ノノ……」

#　サハラを支えながら、上半身だけになったノノをるためにマヤは彼女の手を取る。血は流れていない。体の断面も、人形じみた様相だ。しかし魔導兵の体とはいっても、こんな状態になってしまっては長く稼働できない。

#　きつく当たっていたが、マヤにとっては千年ぶりに会って自分の味方をしてくれた人間だ。思い入れが、ないわけがない。

#「ごめん……本当は、あたし、ノノと会えて嬉しかったの。もっと、ちゃんと──」

#「あ、気にしないでくれたまえ。ボク、ただの録音機だから」

#「──は？」

#　しんみりとした空気が吹っ飛んだ。

#　あ然とするマヤに、ここにいる時間が残り少ないノノは種明かしをする。

#「ボクはいま、君たちからしてみれば千年前の環境制御塔にいて、【星読み】と接続しているんだ。カー君と協力してボクの予知演算をしてね。千年後のシミュレーションをして、【星読み】にボクの声を録音して、行動パターンも設定して動いてるんだよ。未来で起こる危機的状況を予知して、その対策行動を【星読み】に打ち込んでいるんだ」

#　二人の困惑もよそに、なぜか自慢げにノノが自分の予言について披露する。

#「これこそが、ボクの予言の本質だよ」

#「ええっと……つまり、どういうこと？」

#「いま千年前に生きているボクにとってみれば、君は数ある未来シミュレーションの一つでしかないのさ！　ぶっちゃけ、この行動パターン記録も十中八九無駄になると思ってる！　あっはっはっは！」

#「てい」

#「ぎゃぁああああああああ!?」

#　ちょうど壊れた壁の穴のふちにいたので、マヤはノノを環境制御塔から蹴り捨てた。きっとこれが彼女との今生の別れになるだろうと、晴れ晴れした笑顔で落下するノノに手を振った。

#「よし！　これで全部、心置きなく解決したわね！　あとはメノウたちが到着して、この制御室を解析すれば終わり！　……って、あ」

#　自分で言っていて、おかしいことに気が付いた。

#　が、いない。

#　マヤたちは、環境制御塔にがいるという前提のもとに行動していた。彼女の感覚が特有の気配を捉えていた。共鳴していたと言ってもいい。

#　だが、環境制御塔にいないのだ。内壁の一部が原罪概念に浸食されている箇所こそあったが、の姿は影も形もなかった。

#　であるが、もしもゲノムとはまったく違うところで企みを進めていたら。

#　サハラたちはもとより、メノウにも気付かれないところで事態が進行していたら、もはや、止めようがないのでは？

#「──ッ！」

#　その予感はマヤが穴の空いた壁から天井区画を見た時に、確信に変わった。

#

#　ゲノム・クトゥルワが死んだ。

#　サハラたちとはまったくの逆方向から天井区画を進んでいたモモは、天井区画で破壊工作を行っていたゲノムの端末たちが動かなくなったことで、その事実を悟った。

#「ゲノム。お前はよくやってくれました」

#　マヤがこの『遺跡街』にの一部があると気がついた時に、それを所持しているのがゲノムであるということを疑った人物はいなかった。遺跡街にひらめく赤旗。環境制御塔の位置にあるの気配。その二つの要素から、そう考えるのが自然だったからだ。

#　モモがそう予想するように誘導した。ゲノムにのほんの一部の爪を提供してモモが一時的に『遺跡街』に入ることを許可させ、マヤにはその時に滞留したの気配を感じさせた。事情を知るアビィはメノウたちと分断して合流し、彼女が余計なことを必要以上、話させないことにした。アビィには『絡繰り世』で彼女が本当にやりたいことが残っている。

#　彼女は間違いなく人類の味方をしてくれるが、メノウの味方でい続けてくれるわけではないのだ。

#　この騒乱の中、ゲノムにすることなく、かといってメノウたちに利することもなく静かに準備を進めていたモモは、白のキャリーケースを開ける。

#　そこには白い包帯でぐるぐる巻きにされた腕が納まっていた。

#【白】の魔導で編まれた包帯で封印処理を施し、導力をする箱に閉じ込めた気配までは、マヤでも感じることができなかった。

#　ほそく、幼い、万魔の腕。

#　巻かれた包帯の手のひらの隙間から、口が開く。

#「ね、おねーさん！　あたしを解放してくれれば、お礼に一つだけ願いを叶えてあげるわ！」

#　都合のよすぎる言葉は、善意ではない。本意ですらない。気まぐれに、いまの状況に即応した一人芝居をしているだけに過ぎない。もしもモモがつまらない願いを口にすれば、次の瞬間、態度をして襲いかかってくるだろう。

#　だからモモはなにも言わない。なにも望まないことが正解だとわかっていた。ただ包帯を解いてを解放し、背を向けて駆け出した。

#「まあ……残念」

#　にまぁっと笑った幼子の腕が膨れ上がる。二の腕が下半身となって一の腕が上半身に、そして手のひら五本指がこねくり回され、かわいらしい幼女の姿を取り戻した。

#　彼女の足元にある影が、広がっていく。の片腕。彼女に分け与えられた異界が、天井区画を飲み込んでいく。

#　の片腕が動き出す場所は、どこでもよかったのだ。

#　これほどに原色概念に満ちた空間である。空気中に漂う微細導器群を浸食して、原罪概念は止められようもなく浸食する。

#『遺跡街』でメノウを仕留める。そのためにミシェルから指令を受けていたモモが受け取ったものがの右腕だ。

#　影が、広がっていく。

#　光をってできる、通常の影ではない。存在そのものが光を飲み込む、真っ黒な影だ。

#　あれこそが、人間の負の思念が渦巻く広大無辺な異界への入り口。『遺跡街』から脱出しながら、見極めを終えたモモは小さく呟く。

#「あの人は……」

#　メノウの姿を脳裏に浮かべ、にを浮かべる。

#「絶対に、許しませんよ」

#

#